日本クリスチャン・アシュラム連盟
Founded by Eli Stanley Jones

日本アシュラム

1992年7月1日　United Christian Ashrams of Japan　80

開心・静聴・充満・献身・奉仕

世界アシュラムの標語
（コリント第一書十二章三節）
（ピリピ書　第二章　十一節）

不動の御国と不変のキリスト
―S・ジョーンズ博士を想起して―

鍋倉　勲

「このように、わたしたちは震われない国を受けているのだから、感謝をしようではないか。そして感謝しつつ、恐れかしこみ、神に喜ばれるように仕えていこう。」
（ヘブル人への手紙、十二章二八節）
「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも変ることがない。」
（ヘブル人への手紙十二章八節）

スタンレー・ジョーンズ、安村三郎、榎本保郎、M・ギャロット、尾崎主一…日本アシュラムの指導者たちは次々に天に移された。

今回、アシュラムの主唱者スタンレー・ジョーンズ博士を追憶しながら、ヘブル書十二―十三章を瞑想したい。

一九七一年、ジョーンズ博士の第十回全国巡回伝道は、師の日本伝道最後の機会となった。その折のメッセージの一つが「不動の御国と不変のキリスト」を主題に含蓄のある聖書の解き明かしであったことを、昨日の出来事のように想起する。

ジョーンズ博士は、マルクスも、レーニンも、東も西も、南も北も、すべて地上のものは震われる…と霊的洞察をもって予言者的警句を残された。殊に自らの生涯を完全に主に明け渡し、常に御言に聴従し、主の御旨を求め続けた霊的指導者にして今世紀最大の予言者、八七才の博士には、「震われる国」と「震われない国」がはっきりと見えたのであろう。

万物が震われ、天地は滅びるとも（マタイ二四・二五）もはや震われぬもの、過ぎ行くことなき天の全き国をわたしたちは受けているのだから感謝をしようではないか――この勧告、奨励は魂の御心を求め、神に喜んで仕えようと願うわたしたちにとって大きな喜びであり、慰めである。

博士は戦後、日本全国を十回も巡回し、日本を愛し、主にあって期待するが故に、日本が経済面だけでなく、精神面がもっと豊かになり、霊的にも与える国になって欲しいと訴え、祈り続けておられた。

「神の国をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起こしなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい。」
（ヘブル十三章七節）

地位や名誉もすべてを捨て、まず神第一に。御言に聴き、心を開いて瞑想の中で御霊に導かれ、世界各地を宣教して歩き、生涯をインド、世界伝道に捧げた主の下僕、ジョーンズ博士の晩年の信仰の生活はわたしたちの信仰の手本であった。

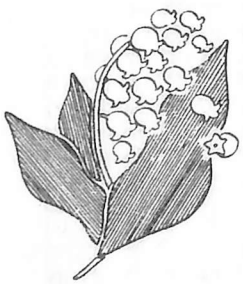
しかし、ヘブルの著者が述べる如く、たとえ何物によっても揺れ動かない信仰の保持者、指導者が立てられたとしても、すべての者は過ぎゆくもの、指導者たちは交替する。

それだから「きのうも、きょうも、いつまでも変わることのない」あの一人の指導者（イエス・キリスト）を仰ぎ見よと、スタンレーは語りかけるであろう。

日本宣教の歩みの中に、主がジョーンズ博士を遣わし用いて下さったことを感謝し、

「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。」（ヘブル十二章）

（筆者は福岡市鳥飼バプテスト教会牧師。九州アシュラム委員）



編集人　渕江淳一
発行人　大石嗣郎
定価　一部60円　〒60円

聖霊と異言の賜物（一）

スタンレー・ジョーンズ

最も大きな必要の一つは、聖霊の再発見である。聖霊ぬきの信仰は、完全になろうとする決心にすぎないが、聖霊によって初めて何事も可能となる。聖霊のないキリスト教は、善人となり義務を遂行しようと意志にむち打って心身を労しもがきつつ、緊張した努力を続けることになる。

聖霊による時、万事に骨折らずに十分確実な触れ合いがある。それによってキリスト教の万事は可能となるだけではなく実現する。聖霊はしょく罪の鋭い展開である。

今日熱心なキリスト者によくある形式主義、粗野な知性主義、現代キリスト教の中途半端性を打ち破り、使途行伝のキリスト教の力と直接性とを発見しようとする飢え渇きがあることは、希望である。私たちはこの渇望と、改変された生活におけるその結果を喜ぶものである。

然しこ聖霊の再発見が多くの場合に、異言の賜物と混同されていることは、困ったことである。『異言の賜物を持つときに聖霊があり、それがないなら聖霊もない。』表現はちがうが、よくこんなことが言われる。

聖霊の所有と異言の賜物の所有とを結び合わせることは、恐らくこの混乱した手探りの時代を叩きつけた最大の精神的災害であると思う。それは現代の思慮ある人々にとり、聖霊を判りにくいものとする以上に、聖霊の賜物を無駄にする何ものでもない。異言の賜物はわけの判らぬ発言で、他の誰かによって通訳されない限り話す者にも聞く者にもわけが判らないからである。ここにペンテコステに用いられた言葉と異言とのちがいがある。あそこでは『全ての人が神のすばらしいみわざを自分の国語で聞いたのである』その言葉は聞いたすべての人に直ちに理解された。それは自分の国語であり通訳を必要としなかった。また彼らが自国語で聞いたのは、迷文ではなく、筋の通った論説で、しかも非常に判り易く実行できるものであったので、人々はそれを受け入れ、回心させられた。このような異言は現代においては、はっきりと再現されなかった。

人々はインド人に伝道しようとして、インド語も学ばず、通訳も用いないでやってきた。そしてその希望は消滅してしまった。もしインドに福音を伝えたいなら、その言葉を学ぶか、通訳者を用いることである。

ではペンテコステ型の言葉の中心点は何であろうか。人々が当時の全世界から、ヨーロッパ、アジア、アフリカからこの祭日に集まっていたことではないか。新しい　罪の運動が展開されていた。もしそれを受け入れたら、あなたはヘブル語とユダヤ文化とを持つユダヤ人になるというほどのユダヤ的な型は破られた。『だれも彼もが神のすばらしいみわざを生まれ故郷の国語で聞いたのである』（使途行伝二章六ー八）。神はこの新生命を表現するために全ての国語と文化とを用いられた。ここで福音はユダヤ民族の偏狭さから解放され普遍化された、型は破られた。これは特別な場合に特別な目的（即ち普遍化）のために行われた特別の奇跡である。この事はユダヤ的排他性の中心エルサレムで起った。それはまたカイザリヤのローマ人コルネリウスの家で起った。また小アジアのギリシャ的異邦文化の中心地エペソにおいて起った。つまりユダヤ、ローマ、ギリシャの文化の中心地において、外語の賜物は聖霊の賜物と結ばれたのである。（使途行伝十章四六、十九章六）。これは偏狭な地方的観念を破り福音を普遍化するための作戦上から与えられた賜物であった。正に『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と十字架上にローマとギリシャとヘブルの言語で記されたのは、全ての国民の国語に彼が王であることを知らせるためであったように、福音はこれらの三文化の中心において直接に彼らの国語で語りかけたのである。カイザリヤでは彼らは『神をさんびする異言で』語ったと言う。それは知らない言語ではなかった。彼らが『神をさんびしている』ことが人々に判ったからである。またエペソでは彼らは『異言を語り、予言をして』いた。そして予言とは事件を予告することではなく、善い音信（福音）を告げ知らせることであったことを人々が理解したのである。

▼アシュラムとは故スタンレー・ジョーンズ博士がインドの退修方式を取り入れて創始されたキリスト教の新しい祈祷生活運動である。

新刊

聖ヨハネによる福音書
ーそのインド人への証しー

A・ダヤ・プラカシュ・タイタス著

海老沢宣道・飯島廣江　共訳

スタンレー・ジョーンズ師はインド人にはインド人の如き心を以て、イエスは宇宙的な主であると説いた。その志を継いでイエスこそインド東洋思想の完成者であると著者はこのヨハネによる福音書の解説を以て力説している。東洋人必読の書。

1992年1月20日連盟発行定価1，200円

アシュラムの五大原則

（一）キリストへの明渡し
（二）御言への静聴と立証
（三）聖霊の啓導と充満
（四）教会への奉仕と伝道
（五）神の国の体験と献身

▼連盟は創始者の祈りによって各地に生まれたファミリーの全国的な交わりであって、常に新しい地区（単位）の参加を期待している。

聖霊と異言の賜物（二）

スタンレー・ジョーンズ

以上のことがある一つの目的のために行われた特種の奇跡として、他と区別されるペンテコステ型の異言である。新約聖書の中で他に『異言』を取り上げるのはコリントだけである。ここには今一つの型の異言が現れている。即ち誰かが通訳しない限り、話手にも聞手にも判らない言葉である。

従ってこれは人間と神との間に、今一人別の仲保者を紹介し、この未知の異言を通訳することを依頼することになる。聖書はイエスこそ一人の仲保者であるという。しかしこれは別のものを置く。通訳者が自分の考えを紹介して、これが神の声だと言ってもどうして判るだろうか。これはあなたの導きを不明の憐れみに委ねることだ。ヘブライ語を学ぶ数名の神学生が、異言の集会に行ってヘブライ語で詩篇二三篇を読んだ。ところが一人の通訳者が立ち上がって通訳をしたが、それは全然この詩篇とは関係のないことであった。

今日見られる異言はコリント型の判らない言葉である。ペンテコステ型では、『皆の者が生まれ故郷の国語で、神の大きな働きを聞いた』のである。このコリントに現れ現代にも現れている不明の型も霊の賜物の一つであるが、霊の各種の賜と、聖書の賜とを混同してはならない。聖霊の賜はすべての人のためであるが、霊の各種の賜は、聖霊が『思いのままに各自に分け与える』のである。パウロは『みんなが医しの賜を持っているのかみんなが異言で語るのか。みんなが通訳するのか』と問う。つまりそうではないが、しかも彼らは聖霊の賜を持っている。この異言の賜は低い賜の一つであるから解く者がいない時は用いるべきでないという。

パウロはコリント型の異言は、伝道の働きとして用いられなかったという。『もし未信者が入ってきて、異言を語っているのを聞いたら、彼はあなたがたを気違いだと思うだろう』。しかしペンテコステにおける異言は、伝道の働きをし非常に効果的な働きをした。

パウロは更に続いて『しかしあなたがたは更に大いなる賜を得ようと熱心に求めなさい。そこで、私は最もすぐれた道をあなたがたに示そう』という。それは愛の道である。第十三章の愛についての議論を十四章一節で結ぶ。即ち『愛を目的とし、霊の賜物、ことに予言することを熱心に求めなさい』と。ここで強調されている二つの賜とは、愛の賜と予言する能力であり、これは良い音信を告げ知らせる力である。

ところで第一コリント書の十二章から十四章にある異言の議論は、パウロ、ヨハネ、ペテロの手紙の全体とその他全ての手紙の中で異言についての唯一の記事である。この三章にだけ取り上げられているのは、それが分裂と混乱の原因になるからである。もしそれが今日ある一部で考えるように重要であるなら、なぜ一回に限らずもっと度々述べられなかったのか。彼らは『愛、喜び、平和』などを何回も繰り返し述べているが、異言の賜は一回きりである。つまり初代教会において異言の賜は重要な働きではなかった。それは静かに背後に廻され、ちがった性格が強く正しく働くようになったのである。

マルコ伝十六章十七節以下の文章の中で主イエスが異言について述べておられるという答が与えられるだろうか。

最近の全ての聖書は、マルコ福音書が十六章八節以下は破損して失われ、二世紀にこの部分を補足しようとの試みがなされたことを示している。前記の用語はその補足の部分にある。それは聖霊の助けを受けない人が挿入したような言葉である。それらのしるしの全てが半ば魔法的で、一つとして道徳的なものがない。もしこれらの事がキリスト信者のしるしであるなら、キリスト教は魔法のように亡んでしまったことであろう。このしるしの中の二つは主イエスにも見出されるもので、彼は悪霊を追放し、病人に手をおかれた。他の三つ、異言を語り、蛇をつかみ、毒を飲むことは、彼にはなかった。イエスに当てはまるものが二つだけで、他の三つは当てはまらない、このようなリストは一体どんなものであろうか。

世紀の名著

スタンレー・ジョーンズ博士の処女作
忽ち世界各国でベストセラーになった
インド途上のキリスト
金井為一郎元訳　渕江淳一新訳
美装幀　B6判　250頁　価1900円　〒250円
若干23才で英国統治下のインドに単身赴任。60年余の生涯を献身し、現代のパウロと称された博士が、主イエスから啓示された奥義は何であったか。

好評・三版出来
海老沢宣道著
『アシュラムの原則と実際』
新書判52頁　価三百円〒72円
スタンレー博士に親しく指導を受けた著者がアシュラムの五大原則と守り方を平易に解説。

◎最近刊好評
インド・アシュラムの指導者
D・P・タイタス師著
海老沢宣道訳
『聖霊のバプテスマ』
現代教会が忘れている信仰上不可欠の体験を学修する良書・
新書判・約60頁・定価三百円

聖霊と異言の賜物（三）

スタンレー・ジョーンズ

あのしるしのリストと平行して、次の聖句がある。「しかし御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、忠実、柔和、自制である」（ガラテヤ書五章二二）。この一つ一つは全て道徳的である。どちらのリストが忠実な神の霊感を示しているか。クリスチャンの良心は「愛に始まり、自制に終るリストこそ、神の霊感によるリストである」と、ためらわずに言う。そしてこのリストの全ては主イエスに当てはまる。彼はそれら全てを具現化されたのである。

○

ここで「主イエスは聖霊を持っておられたか」という質問が起る。答は然である。その上彼が異言を語られたということを追加する必要があるか。私は彼の有りのままを望む。もし主イエスが聖霊を持ち、異言を語らなかったのなら、私も聖霊を持つことができて、異言を語らない彼のようでありたい。仮にこれら御霊の九つの実を具体化したとしたら、あなたはどのような人格となるだろうか。最上のタイプである。また仮にマルコ伝十六章十七の五つのしるしを具体化したとしたら、あなたはどんな人格であろうか。蛇をつかんでもかみつかれず、毒薬を飲んでも死なないことを演技する宗教的な演芸家のタイプとなるであろう。なぜ新しい異言を語るというしるしだけを取り上げ、蛇をつかんだり、毒を飲むことはやらないのか。なぜ五つのしるしを全て取り上げないのか。全てがだめになるからである。

○

今日ある人々が聖霊に満たされて、その経験の一部として異言を語ることを疑うことができようか。私はあり得ると信じる。しかし必然的にではない。何百万人もの人々が聖霊に満たされたが、異言を語ることはなかった。更に次の事を言わなければならない。聖霊の降臨が異言を伴うことを教えられた所でだけこの現象が起きている。私は全大学が回心したリバイバルに行ったことがある。全ての学生と付近の町から集まった人々は講堂に入る前に、聖霊の力に打たれ、回心させられた。しかも誰一人異言を語らなかったのは、なぜか。教えられなかったからである。聖霊の充満に伴うしるしは「愛、喜び、平和、その他」であると教えられた結果、人間が改変したのであった。

○

前記のような現代的な異言の表明においては、教えられるだけでなく、しばしば誇導されている。求道者を一つのグループが囲んで皆が彼の上に手を置き、求道者は時にはその流れを始めるために何か知っている異国語を言うように強制される。或は彼のあごをゆるめて、舌をぶるぶるさせるように指示される。或はイエスの名を何度も繰り返すように求められ、続いてどもり始めるまでにどんどんと速度を早めさせられる。

「さあ、あなたはできるようになった。聖書は、我どもりの唇によって彼らに語らん、とあるから」と告げられる。

○

それ故に異言の用法が常に区別されたことは疑いもない。アフリカのウガンダの大リバイバルで医療宣教師チャーチ博士は、神に大いに用いられた感動力であった。数千人が回心し、村々や地区全体が改変した。チャーチ博士は異言を語る他のグループの所へ行き帰ってきて、ウガンダ・リバイバルで異言を語り始めた。アフリカ人の指導者たちは彼を呼んで、『このことはあなたを誇らせてそのために人々を分裂させるだろう』と言った。彼は彼らの方が正しいことを知って、異言を語ることをやめ、生まれ変る人々を造る本来の仕事に専念した時、リバイバルは力と一致とをもって進展して行ったのである。

○

アシュラムにおける我らの態度もこれである。我らは浸礼派、非浸礼派、などあらゆるクリスチャンを歓迎するように異言を語る人々をも、我らの交わりに歓迎する。なぜなら、聖霊に充満せる人格の模範は、主イエスだからである。我らは聖霊に満たされ、彼のように成ることを願う。彼は我らの一致の中心であり、聖霊に充満せる生活の模範である。

『イエスは主で』（ロマ書十章九節）

第三十回関東アシュラム

委員長　向山　自助

①日　時　九月二一日（月）から二三日（水）まで
②参加目標　一〇〇名
③会　場　箱根アカデミーハウス
④助言者　救世軍の河合光治先生

先生の長い信仰の精神的戦いから福音が証されることでしょう。「ヨセフは実を結ぶ若木、泉のほとりの実を結ぶ若木。その枝は、垣根を越えて伸びる。」と父ヤコブは予言しています。今回のアシュラムは主のお導きの故に、この末の世に在って多くの実を結ぶ若木として奮い立たされることでしょう。祈って御参加下さい。

東京都目黒区中央町1-21-10
碑文谷教会気付
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座東京〇-四五五八番
理事長　海老沢　宣道